經濟論叢 毎月一日發行
第四十九卷第六號 昭和十四年十二月一日發行
大正四年六月二十一日 第三種郵便物認可

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十九卷 第六號

昭和十四年十二月

論叢

近世中期の經濟思想……　經濟學博士　本庄榮治郎

波動の內在性……　文學博士　高田保馬

時論

水產食糧の確保と漁業組合……　經濟學博士　蜷川虎三

法幣對策論の起結……　經濟學士　德永淸行

研究

遼史食貨志に見はれたる經濟思想……　經濟學士　穗積文雄

問屋の歷史的特質……　經濟學士　堀江英一

エッヂワースと「統計の方法」……　經濟學士　理學士　馬場吉行

說苑

クラークの植民地無價値論……　經濟學士　金持一郎

大工場が地方經濟に及ぼす影響……　經濟學士　菊田太郎

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第四十九卷總目錄

（禁轉載）

第四十九卷　八七八　第六號　八八

『問屋』[1]の歴史的特質

——ドイツ歴史學派の所論を中心として——

堀江英一

一　はしがき

問屋制工業はマニュファクチュアとともに、商業資本・高利貸資本・親方資本等の前資本主義的資本の産業資本への過渡期を示す工業經營組織であり、近代的資本關係形成過程の重要なる擔手である。加之マニュファクチュアが專ら産業革命の技術變革を準備したとすれば、問屋制工業はかゝる段階の廣般な工業生産を把握し後に産業革命が創出する近代的資本關係を用意したと云へるのである。

本稿はドイツ歴史學派の經濟學者が問屋制工業從つて問屋の性格をいかに把握したかを問題にしてゐる。ドイツに於てこの問題が論議されるに至つたのは、十九世紀後半殊に八十年代以後であつた。しかも最初は我々が問題としようとするが如き形態に於てゞはなく、當時ドイツが當面しつゝあつた社會問題としての『家内工業問題』として論議された。恰かもこの時代はドイツ産業革命の發展期にあたり、機械制大産業は問屋制工業を破壞しつゝあつたが、この過程は必然的に家内工業者の工場勞働者への轉化過程に伴ふ家内工業者の窮乏と云ふ社會

1)　問屋とはこゝでは問屋制工業のもとに於ける問屋 (Verleger) を指す。以下特別の斷りなき限り問屋はこの意味に使用されてゐる。

問題を喚起し、この問題をめぐつて問屋制工業はいかなる分野に於て工場と競爭しうるか、問屋制工業に對する社會政策的價値判斷、家內工業者窮乏の根本原因等々が論ぜられた。然し論議がかゝる社會問題に極限されてゐる限り、『家內工業問題』は我々の問題と關係はないが、これらの論議にたづさはつた歷史學派の經濟學者はこれを契機として、我々が問題にしようとする近代的資本關係形成過程に於ける問屋制工業從つて問屋の性格の究明に赴いたのである。かのブェッヒァーの工業發達階段說も社會問題としての手工業問題・家內工業問題と密接な關聯を有してゐる。[2] かくて歷史學派の經濟學者はかゝる歷史的把握のうへに立つて當時直面した社會問題を解決しようとしたのである。本稿はこれらのドイツ歷史學派の文獻の檢討を主要課題としてゐる。

一　問屋の性格

近代的資本關係は云ふまでもなく、生產手段の獨占的所有者としての資本階級と生產手段を所有しない直接生產者階級を前提とし、かくて生產手段は生產資本として、勞働力は資本階級に購買され生產資本の一部として生產手段と結合される賃勞働力に轉化される。然しかゝる近代的資本關係の確立、換言すれば近代的資本關係が完全且つ支配的に全生產を把持するためには、廣般な市場領域の形成を條件とする技術革命＝產業革命が必要であつた。中世社會の埒內に於て自由平等博愛を實現してゐたギルド的手工業は、この技術革命を契機として近代的資本關係の權化としての機械制大工場制度に推移したのである。

然し勿論技術革命を契機として惹起された近代的資本關係の確立は偶然的でない限り、ながいそれの形成過程

2) Vgl. Bucher, K.; gewerbliche Betriebssysteme in ihrer geschichtlichen Entwicklung—Entstehung. Samml. I, Aufl. 16, S. 163–5.

3) Bücher, K.; Die gewerbliche Betriebssysteme—a. a. O. S. 185. Bücher の原文に於ては「兩組織」は「工場」と「問屋制工業」である。Bücher の「工場」は今日の所謂マニュファクチュアと機械制大工場を意味し、Held の如くマニュ

をもつてゐた。かゝる近代的資本關係形成過程に於て、來るべき技術革命を準備したのがマニュファクチュアであり、近代的資本關係そのものゝ形成に專ら參加したのが我々の問題とせんとする問屋制工業である。

周知のやうに中世末期に出現した市場の擴大は、マニュファクチュア及び問屋制工業に對する市場條件を充した。蓋し『兩組織は工業生産物を廣い市場領域に供給することを使命とする』[3]からである。かくして市場の擴大は一方にマニュファクチュア他方に問屋制工業を成立せしめ、しかも兩者は『全體の發展順序に於て同一線上に立つ』[4]のである。

然しこの二つの組織は著しく性質を異にしてゐる。しかして『この兩者の相異れる點は唯々この任務を完うする方法と勞働者編制の方法にのみ存するのである。』[5]マニュファクチュアは或は既に社會的に分業化してゐる手工業をマニュファクチュア內部の分業に組織し、或は從來の手工業を先づ單純協業化し漸次分業化したが、そこでは既に生産手段は直接生産者の手を離れ經營主の資本に轉化し、直接生産者は實質的にも外見的にも手工業者の獨立を喪失した賃勞働者である。問屋制工業に於てはマニュファクチュアほど手工業の獨立に對立する外觀を示さない。手工業者は獨立を喪失して家內工業者に轉落するが、家內工業者は勞働手段、多くの場合には勞働對象すらも所有し、從來の生産方法通りに生産して居り、その資本への隸屬は著しく間接的・商業資本的である。

かくの如くマニュファクチュアに於ける資本の生産支配は既に近代的資本關係を前提として居るに反し、問屋制工業に於ては少くとも外見上は直接生産者は生産手段を所有してゐる手工業者の延長の如く見えるが、直接生産者はそれにもかゝはらず手工業者の獨立を喪失した家內工業者であり、資本の生産支配が存在する。問屋制工業

フアクチュアそのものゝ存在を否定したものではない。Bücher は分業を强調する餘り、機械の革命的意義を把握することができず、マニュフアクチュアと機械制大工場を分業を本質的特徵とする「工場」に包含せしめたのである(Vgl. Bücher, K.; a. a. O. S. 188. Gewerbe—Handwörterbuch der Staatswissenschaften. Bd. 4, Aufl. 4, S. 991-2)。こゝでは「工場」はマニュフアクチ

に於けるかゝる資本の生産支配は何に基くのであらうか。このことを明らかにするために我々は問屋制工業を、手工業的技術に立脚せるそれとマニュファクチュア的技術に立脚せるそれとに分つて説明せねばならない。

問屋制工業は『その初期に於ては在來の生産方法には全然觸れず、たゞその販賣のみを組織せんとした[6]』のである。社會的分業の發展從つて市場の擴大は顧客生産を基調とする手工業をして遠隔の市場、往々世界市場を對象とする生産を餘儀なくさせたが、在來の生産方法—零細生産・手工的技術・家長制的生産・生産手段の所有等々—に立脚する手工業はこれらの廣大な市場と直接に關係することはできない。かくして從來は當時の對外商業に極限され、ギルド組織により制限されてゐた商業資本が廣大な市場と零細手工業との結節點として重要な機能を演ずるに至る。[7] 商業資本の結節點としての機能が強化すればする程手工業者は、原料調達製品販賣に於て商業資本に依存するに至り、遂には生産の種類・程度が全く商業資本により決定されるに至る。かくして手工業者の生産の種類・程度が商業資本により決定されるに至ると、商業資本は問屋となり、手工業者は家内工業者となり、問屋制工業が形成される。[8] この段階に於ける問屋の家内工業者の生産支配は專ら問屋による販路の獨占に基くのである。

更に問屋制工業が進歩すると、家内工業者の獨立の喪失は、單に彼等の生産物の販路が問屋に獨占されてゐるためばかりでなく、更に技術的原因にも基づくに至る。既に述べた如く市場の擴大は問屋制工業のほかにマニュファクチュアを成立せしめたが、マニュファクチュア内部に分業が發展するにつれて、問屋制工業も又かゝる分業のうへに再編制される。マニュファクチュアは周知の如く手工業に於て單獨の勞働者（親方・職人・徒弟）により行はれた生産段階を更に分化し且つその各段階を專門的勞働者をして擔任せしめ、道具を分化せしめ、産業革命の技術

ユアとすべきであらう。

4) Bücher, K.; Gewerbe—a. a. O. S. 995. この文章は Bücher の工業發達諸段説に矛盾するが如くであるが、彼の階段説に於て問屋制工業・工場の順序となつてゐるのは資本と勞働者の支配關係の强弱に注目したためであつて、必ずしも時間的順序からではない（Vgl. Bücher, K.: Die gewerblche Betriebs-

的準備をしたのであるが、かくしてマニュファクチュア内部に於て專門的部分的道具と專門的部分的熟練を有する部分勞働者とにより行はれる部分的生産各段階は外化されて、この部分的生産各段階を擔任する多數の異種的な部分的家内工業者が成立する。[9] かゝる過程を通じてマニュファクチュアがもたらした生産力水準は問屋制工業に於ても維持される。[10] ところがこれらの家内工業者により擔任される部分的生産各段階はそれ自身としては存在價値を有せず、他の部分的生産各段階と結合されることにより、始めて商品性をもつ生産物の部分段階として意味をもつ。從つてかゝる部分的家内工業者は多數の異種的家内工業者の擔任する異つた生産各段階を統一する生産段階統一者なしには存在し得ない。生産段階統一者は問屋（生産設備を有しない商人的問屋・マニュファクチュア・大模親規方等々）である。かくてこの段階に至ると問屋の家内工業者の生産支配は販路の獨占に基づくのみならず、生産段階統一の機能にも基づくのである。

以上述べた如く問屋は先づ販路の獨占により、ついで生産段階統一の機能により、直接生産者たる家内工業者の獨立を剝奪し、實質上賃勞働者に轉化する。從つてマニュファクチュア經營者が近代的資本關係に立つて直接生産者を賃勞働者に轉化したとすれば、問屋制工業に於ては問屋は在來の生産方法—生産手段の直接生産者による所有零細生産・手工的技術・家長制的生産等—に立つ直接生産者を實質上賃勞働者に轉化すると云ふところに問屋の歴史的特性を見得るであらう。

マニュファクチュアが手工的分業のうへに立つて從來の生産方法を根本的に變革し、問屋制工業が從來の生産方法に立ち乍ら實質上直接生産者を賃勞働者に轉化すると云ふ兩者の性格の相異は兩者の普及の著しい相異の原因

systeme—a. a. O. S. 190-191)。
5) Bücher, K.; a. a. O. S. 185.
6) Bücher K.; a. a. O. S. 185.
7) Vgl. Schmoller, G.; Die geschichtliche Entwichlung der Unternehmung. V. Hausindustrie—Schmollers Jahrbuch. Jg. 14. Heft. 4, 1890, S. 23. Schmoller

を説明する。マニュファクチュアは從來の生産方法を根本的に變革するが故に中世的社會組織・ギルド組織に直接衝突するのみならず、それがもつ手工的技術と云ふ制約はその反對物を根底から覆へすことができず、從つてその歴史的重要性にもかゝはらず全工業生産を把握することができなかつたが、問屋制工業はその性格の一面として從來の生産方法に立つと云ふ性質を有するために中世的社會組織・ギルド組織のあらゆる間隙からしのび込み、殆んどあらゆる工業生産を把握し、中世的工業生産組織を實質的に變質させた[11]。然しそれがもつかゝる性格こそ他方に於て産業革命の技術變革を準備せず、技術變革により根底から覆へされる原因であつたのである。それはとにかくかゝる普及の相異が多くの經濟史家をしてマニュファクチュアの意義を過少評價せしめ[12]、問屋制工業の意義を過大評價せしめたのであるが、兩者は右に述べた如く著しく異つた歴史的役割を果した不可欠の歴史的存在である。

かくしてマニュファクチュアと問屋制工業は中世社會の資本たる商業資本・高利貸資本・親方資本と近代的産業資本との中間的資本支配の形態であり、それに相應した性格と機能を有したこと右の通りである。

この問屋制工業從つて問屋に關する文獻はF. F. Becher（一六六八年）von Schröder（不明）その他のカメラリストにも既に見られるが[13]、こゝでは專ら十九世紀後半に表れた主要なドイツ歴史學派の諸文獻がこの問題をいかに取扱つたかを見ることにする。

三　問屋の性格に關する諸研究

はこゝで手工業者がギルトを利用して（1）間接的・カルテル的方法（2）die eigentliche Einkaufs- u. Vertrichsgesellschaften により自ら販賣を組織し、商人の介入を排除せんとしたことを述べてゐる。尚ほ Schmoller はこゝでギルドが市場の擴大を契機として内部的に崩壞せざるをえなかつたことを强調してゐる。

ドイツ歴史學派のこの問題に關する實證的・理論的研究は夥しい數に上つてゐるのみならず、その論ずるところも區々である。加之これらは直接には問屋制工業の性格規定を課題にしてゐる。然し問屋制工業の性格は根本的には問屋と家内工業者との關係によつて規定されるのであるから、問屋制工業の性格に關するこれらの研究から彼等が問屋の性格をいかに理解したかをうかゞふことができる。

問屋の性格に關するドイツ歴史學派の規定は極めて一般的にではあるが二つの傾向に、すなはち問屋を單なる商人或はせいぐ〳〵配給上の問屋と見る傾向と問屋を産業資本家と見る傾向とがある。

(I) 商人說　問屋を單なる商人と見ようとする傾向のうちにも色々の見解があること云ふまでもないが、こゝではスティーダとリーフマンについて述べることにする。リーフマンは歴史學派の經濟學者ではないが、彼が一つには歴史學派の問屋規定の一傾向を極端にまで發展せしめ、二つにはその立場に立つて他の傾向を代表するシュモラー、ブッヒァー、ゾムバルトを批判してゐるから、こゝではリーフマンに關說しないわけにはゆかない。

(A) スティーダ　『私は家内工業のもとに家庭で、その地方の顧客の注文または地方的販路のためでなく、原則として商館または輸出のため、專ら大規模販路のために働く工業活動を理解する。家内工業を手工業から區別するものは販路の種類に、工場から區別するものは勞働者の從業の場所である。家内工業と手工業とは勞働場所の狹いこと、補助人員の重要でないことを、工場とはその完成生産物の販路の大なること……を共通にする。家内工業者に對し加工さるべき原料が商館の側から行くか或は自ら調達するか（賃銀制か買取制か—筆者）を私は副次

9) Sombart, W.; Die moderne Kapitalismus. Bd. 2, HbBd. 2, Aufl. 2, 1928, S, 724.

10) マニユフアクチユアとの關係に於てゞはないが、家内工業者相互間の分業は多くの文獻を觸れられてゐる (Vgl. Held, A.; Vortrag über Handwerk und Grossindustrie—Zwei Bücher zur sozialen Geschichte des Englands. 1881, S.

的要素と見る。それ故に私は販路關係の構成を家内工業の特徴的要素であると强調する。まさにそれによつて家内工業者の大なる經濟的從屬、大抵の彼等の壓迫された狀態は惹起される。[14]』かくの如きがゾムバルトによつて『輸出手工業』(Export-Handwerk)說と稱されたスティーダの問屋制工業の規定である。

輸出手工業說は副業說(Nebenbeschäftigungstheorie)と相並んで問屋制工業に關する古くからの見解である。John Browingの『ドイツ關稅同盟に關するパーマーストン鄕への報告』(一八四〇年獨譯)、A. Meitzenの『シュヴルツヴルトの時計工業について』(一八四五年)、W. Roscherの『大工業と小工業について』(一八五五年)、G. Schmollerの『十九世紀におけるドイツ小工業の歷史について』(一八六九年)に於ては略々スティーダと同一見解が述べられてゐる。[15]

スティーダは直接には問屋制工業について述べてゐるから、我々はこゝから問屋に關するスティーダの見解をうかゞはねばならぬ。先づ第一にスティーダに從へば家内工業者は販路の種類により手工業から區別されるにすぎず、問屋への隸屬によつてゞはないのである。從つてスティーダの見解によれば家内工業者は根本的には『自由獨立なる』手工業の延長にすぎないことになる、ゾムバルトの『輸出手工業』說なる特徴づけはこの點に基いてゐる。

從つて第二に家内工業者が『自由獨立なる』手工業の延長にすぎないとすれば、問屋の家内工業者支配は問屋の本質的性格ではないことになる。かくて問屋はせい〳〵零細生產者たる手工業者と廣大な市場を連絡する單なる商人にすぎないことになる。

(B) リーフマン[16]　スティーダはさきの引用文の示す如く家内工業者の經濟的隸屬を副次的要素としてゞはあるが認めてゐる。リーフマンに至るとかゝる經濟的隸屬は全く彼獨特の交換概念のうちに埋沒されてしまふ。

リーフマンの問屋制工業の規定は次の三段論法からなる。第一の規定—『我々が…工業活動の本質的・決定な

972. Bücher, K.; Gewerbe—a. a. O. S. 986. Sombart, W.; a. a. O. S. 728–9.)

10) Sombart, W.; a. a. O. S. 728–9.

11) Schmoller, G.; a. a. O. S. 23–24.

12) 例へば Held, A.; a. a. O. S. 678–681 はこれに屬する。Bücher については

標識としたのは交換經濟的組織である。[17]』第二の規定—『すべての交換經濟的行爲の區別に對する最高の經濟的見地は生産物が賣られるか、給付（Leistung）が賣られるかと云ふことである。請負仕事（Werkverdigung）は後者に屬し、請負仕事契約は勞働契約である。さて私はかゝる勞働契約に入る勞働者が獨立であるか獨立でないかの事情を勞働契約の根本的差別標準と見る。[18]』リーフマンの規定はかういふことになる、車輛會社は車輛（生産物）を販賣するに反し、鐵道會社は運輸サービス（給付）を販賣するのであるから、車輛會社と鐵道會社とは根本的に異る範疇に屬するが、鐵道會社と鐵道從業員とは『勞働者』の單なる內譯にすぎない。この奇妙なる規定から結論を導きだす。結論—『問屋制生産は、…獨立の一經濟主體が、その生産物を賣る…意志のある一注文者のために、勞働を給付しまたは彼（問屋制生産者—筆者）の雇傭する非獨立勞働者をして給付せしむるところの工業生産である。或は簡單に云へば問屋制生産者は彼の提供した生産物を交換にだす意志のある注文者と仕事請負契約を締結した被注文者である。[19]』すなはちたとへ經營主たゞ一人或は家族たちだけであらうと數百數千に上る賃勞働者と近代的大設備を使つてゐる大工場であらうと、彼が注文者の原料を加工し、それが注文者の手に於て販賣される限り等しく『獨立』の問屋制生産者であり、注文者は問屋であることになる。

この見解は既に A. Thun の『下ラインの工業及びその勞働者』（一八七九年）、A. Held の『イギリス社會史二卷』（一八八一年）に萠芽的に表れ、Schönberg Lexis にも近いが、リーフマンほど大膽且つ非歴史的ではなかつた。リーフマンのこれらの諸學者に對する不滿はこゝにあつたのである。[20]

かくの如くリーフマンの問屋制生産者は賃銀制（Lohnsystem）の家內工業者から近代的な大企業までを含んでを

既に述べた。

13) Liefmann, R.; Über Wesen des Verclags (der Hausindustrie). 1899, Kap. 2.
14) Stieda, W.; Literatur, heutige Zustände und Entstehung der deutschen Hausindustrie—Schriften des Vereins für Sozialpolitik. Bd. 39, 1881, S. 22.
15) Stieda, W:; Literatur. Sombart, W.; Die Hausindustrie in Deutschland—

り、從つてかゝる非歴史的・形式的概念に含まれる家内工業者が近代的な大企業と等しく『獨立の經濟主體』と考へられるのは不思議ではない。かくの如き『獨立の經濟主體』と取引する問屋はその生産物を賣却する目的で勞働を注文する商人であるのは當然であらう。[21]

以上述べた如くスティーダとリーフマンの問屋制工業、從つて問屋と家内工業者の性格規定はかなり異つた色調をもつてゐるが、然し問屋を商人、家内工業者を獨立生産者と見て、兩者の間に經濟的從屬關係を見なかつた點に於てはスティーダもリーフマンも一致してゐる。換言すればスティーダもリーフマンもともに問屋制工業のうちに近代的資本關係の萠芽を、形成過程を見ず、從つて問屋と家内工業者のうちに近代的資本家と賃勞働者の萠芽形態を見ることができなかつた。かくして商人説は機械制大産業のもとに於ける家内工業問題は云ふまでもなく近代的資本關係形成過程をも説明しえないであらう。

（Ⅱ）**産業資本家説**　オット・シュヴルツが工場を『集中的大經營』(zentralsiert Grossbetrieb)[22]、問屋制工業を『分散的大經營』(dezentralsiert Grossbetrieb)[23]と規定して以來、問屋制工業のうちに工場に於けると同じ近代的資本關係を從つて問屋と家内工業者のうちに夫々産業資本家的性格と賃勞働者的性格を認めようとする傾向が強く表れた。加之この傾向は當時の家内工業者の狀態により支持されてゐた。蓋し當時の家内工業者は工場勞働者よりも遙かに悲慘な生活狀態にあつたから。

シュヴルツにはじまるこの傾向は一方にシュモラー・ブッヒァーにより、他方にゾムバルトにより繼承されたと見ることができる。

Archiv für Sozialpolitck und Sozialwissenschaft. Bd. 4, 1891, S. 107-8.
16) 詳細については拙稿；リーフマンの問屋制度論—經濟論叢第46卷第2號參照。
17) Liefmann, R.; a. a. O. S. 50.
18) Liefmann, R.; a. a. O. S. 36.
19) Liefmann, W.; a. a. O. S. 40.

(A) シュモラー・ブュッヒァー　シュモラーの問屋制工業の規定は次の如くである。『我々は家内工業または家内製造業…の名稱のもとに生産が家族に於て、家に於て、手工業的に、簡單な技術を以て行はれ、之に反し販賣はもはや生産者自身により行はれず、商業經營者なる特殊の階級—彼等が自分でもまた個々の技術的處理を行ひ、その家又は事務所に於て個々の賃勞働者をもつと否とに關せず—によつて行はれることにより特徴つけられる、すべての種類の工業經營を包含する』[24]と。かくの如く問屋制工業は販賣を擔任する問屋と生産を擔任する家内工業者の存在を前提するが、屢々述べた如くこの問屋と家内工業者の關係のうちに我々の問題があるのである。この問題に關するシュモラーの意見を聞かう。問屋制工業に『本質的なことは相作用する二つの異つた社會階級のうちに、即ち手工業的胴體が商人的頭腦を持つことのうちにある。商舘は一定數の、屢々數百の個人、家族及び小仕事場が技術的に生産したものを販賣する。二つの社會階級の關係は多様である。然し乍ら常に二重のことが主要なことゝして殘る。』[25]そのうちの一は『兩群の人々が相互に依存し合つてゐる、販賣事業と生産事業はたとへ私法上一定數の大小企業と賃銀契約とに分裂してゐても事實上全體を構成してゐる。』[26]二は『問屋は…常に生産者よりすぐれてゐる』[27]といふことである。かくて『全體』を構成する問屋と家内工業者の間の『社會的ヒエラルキーは自明の事柄である。』[28]

ブュッヒァーは問屋と家内工業者との關係を更らに巧妙に說明する、『フェアラーク經營は首腦經營と分枝經營に作用が區別され、前者は販賣を取扱ひ市場關係に應じて生産を指揮し、家内勞働者經營はフェアラーク企業により與へられた限界内の生産に自制するところの聯合體である。前者は支配經營、後者は勞務經營である』[29]と。

20) Liefmann, R.; a. a. O. S. 20–21.
21) Liefmann, R.; a. a. O. S. 40.
22) Schwarz, O.; Die Betriebsformen der modernen Grossindustue—Zeitschrift für die gesamte Staatsw. Bd. 25, 1869, S. 542.
23) Schwarz, O.; a. a. O. S. 546.

上述したところから明かなる如く、シュモラー・ブュッヒァーは問屋と家内工業者を以て『全體』『聯合體』と考へ問屋の家内工業者支配を認めてゐるが、しかも尙ほ近代的資本關係の存在を否定する。ブュッヒァーは云ふ、『彼等（問屋と家内工業者—筆者）は相互に分業關係に立つ。彼等の關係はかれらの間に於ては工場に於けるが如く支配と從屬を必要としない[30]』『…常に家内工業者にはある程度まで獨立した小經營が殘る。それがその生産に於て問屋の企業に特殊の存在を導入する』[31]と。シュモラー・ブュッヒァーは彼等の所謂家内工業者に殘された『獨立』に依據して家内工業者に對する牧歌的解釋を導き出した。

然し家内工業者に殘された『獨立』は外見上の『獨立』にすぎない。なるほど家内工業者は工場勞働者の如く全生産手段を喪失してをらず、從つてその勞働力は商品化してゐないから、『獨立』であるやうに見える。然し彼等の喪失してゐる市場販路の支配權、生産段階統一力は、恰かも工場勞働者が工場主なしには生存しえないやうに、彼等をしては問屋に隷屬せしめる。シュモラー・ブュッヒァーは家内工業者の外見上の『獨立』の背後にある獨立の喪失を理解しなかつた。

ブュッヒァーは現實の前には自己の見解を修正せざるを得なかつた。玩具工業につき云ふ、『人は尙ほ廣くこの經營形態（問屋制工業—筆者）を理想視してゐる。その理由はかうである。一方にはその世界市場目當ての生産により手工業の限界を脱しうるし、他方には工業が必然に伴ふ勞働者の資本への依存が認められないから、生産者はある程度まで獨立であるから[32]』『然し實際には生産者の狀態は尙ほ著しく異る。子供のサンタクローズ（玩具製造家内工業者—筆者）は決して安樂な、否な人間らしい生活すら享樂してゐない。彼等は彼等と彼等の生産物の消費者との間に介入して販賣の斡施に致すかの商人的仲介者への絶對的依存に惱んでゐる。[33]』

(B) ゾムバルト[34]　家内工業者の『獨立』を否定し、家内工業者に對する牧歌的解釋を批判することにより、ゾムバルトはシュモラー・ブュッヒァーより更に一歩を進める。ゾムバルトは問屋制工業に關して、『家内工業とは

24) Schmoller, G.; a. o. O. S. 24-5.
25) 26) 27) Schmoller, G.; a. a. O. S. 25.
28) Schmoller, G.; a. a. O. S. 26.
29) 30) 31) Bücher, K.; Gewerbe—a. a. O. S. 976.
32) 33) Bücher, K.; Die Hausindustrie auf der Weihnachtmarkte—Entstchung.

勞働者がその自宅に於て雇傭されるところの個人資本主義的經營組織である[35]』と述べてゐる。從つて問屋制工業のうちに近代的資本關係の存在が確認されてゐるが、然らばゾムバルトは何に基いて近代的資本關係の存在を確認してゐるのか、ゾムバルトは云ふ、『資本主義的企業家が獨占的に所有するところの「生產要素」は、家內工業に於ては物的生產手段の全體でなく、寧ろ市場・販路である[36]』と。從つてゾムバルトに從へば問屋は市場・販路の知識なる『生產要素』を有するが故に近代的資本家であり、家內工業者はこれをもたないが故に賃勞働者であり、かくて問屋制工業のうちに完全なる資本關係が認められると云ふことになる。かくて問屋制工業が資本主義的經營組織である以上、マニュファクチュア・工場とは單に勞働者從つて勞働が集中してゐるか分散してゐるか以外に差別はない。ゾムバルトが屢々資本主義的工業組織を平面的に問屋制工業とマニュファクチュア・工場とに區別したのはこのためである。それは兎に角として以上の如きゾムバルトの考察からすれば、問屋制工業は近代的資本關係形成過程の組織としてゞなく、資本關係の完成した組織として表れた[37]。

かゝるゾムバルトの誤謬は市場・販路の智識を生產要素としたことにある。このことは彼の方法論とも矛盾する。リーフマンはこの點を指摘して、『ゾムバルトは人々が販路の性質を工業活動の差別標識とすることを非難した。然し彼自身は販路の智識を生產要素にすらした[38]』と云つたのは當つてゐる。ゾムバルトは寧ろ生產手段が家內工業者の所有に屬し、從つて問屋制工業には完全な近代的資本關係が存在しないにかゝはらず、問屋による市場・販路の獨占は家內工業者の『獨立』を完全に喪失せしめたと云ふべきであつた。

以上詳述した如くシュヴルツの『分散的大經營』なる見解はシュモラー・ブッヒァーを通して、ゾムバルトに於て行きつくす點にまで到達した。シュモラー・ブッヒァーはこの道程に於ける中間標であり、彼等は問屋による家內工業者支配を認めながら、しかも家內工業者が生產手段を所有してゐることを理由として家內工業者の『獨立』を

Samml 2, S. 175.

34)　詳細については拙稿；問屋制工業の資本家的性格—經濟論叢第47卷第1號參照。

35) 36)　Sombart, W.; a. a. O. S. 117.

37)　Held は略々同一の見解を示してゐる、曰く「一場工業を支配にもたらしたそれ以後の過程は、速かに、俄かに、そして非常に大規模に完成されたが、然

認めた。家内工業者が生産手段を所有して居り、從つて問屋制工業のうちに完全な近代的資本關係を認めなかつた彼等の見解は正しいが、家内工業者が生産手段を所有することは直ちに家内工業者の『獨立』を保證するものではない。ゾムバルトは家内工業者の『獨立』を否定すると云ふ正しい企圖のために、家内工業者から生産手段を奪取すると云ふ誤謬を犯した。かくの如く産業資本家説は多くの誤謬を犯してゐるが、しかもなほ商人説よりも遙かに眞實に接近してゐる。

四　むすび

以上詳述した如く問屋制工業は一方に於て從來の生産方法に立脚し、從つて零細家内工業者は勞働手段、往々勞働對象をも所有し、前資本主義的生産方法に立脚しながら、他方に於て問屋により販路を獨占され、更には生産段階統一の機能をも獨占されて、實質上賃勞働者に轉化すると云つた工業生産方法であり、恰かも近代的資本關係の形成過程を表徵してゐる。問屋制工業從つて問屋のもつかゝる二面性こそ中世的社會組織・ギルド組織を覆へし、近代的資本關係を用意すると云ふ歴史的機能の基礎である。

ドイツの歴史學派の經濟學者は問屋制工業從つて問屋のもつかゝる二面性を理解しえなかつた。商人説は家内工業者を手工業者の延長と見、問屋を單なる商人と見ることにより、問屋制工業のうちに近代的契機を見なかつたとすれば、産業資本家説は問屋制工業のうちに近代的契機のみを見て、手工業的契機を見なかつたと云へる。眞理はかゝる手工業的契機と近代的契機の對立的統一のうちにあり、決して問屋制工業の牧歌的解釋のうちにあるのではあるまい。ドイツ歴史學派の兩方向への偏向は同時に問屋制工業の歴史的機能更には近代的資本關係形成過程の理解を妨げるであらう。

しもはや古い社會秩序の獨立の變革ではなかつた」(Held, A.; a. a. O. S. 676) と述べ、手工業より問屋制工業への推移により近代的資本關係が完成したことを强調してゐる。

38) Liefmann, R.; a. a. O. S. 18.